馬祖門派と南宗禅の関係
――鵝湖大義の史的意義――

千田　たくま

一　問題の所在

唐王朝後半期が安史の乱（七五五～七六三）によって開幕する。それは開幕の主役を張った安禄山（七〇五～七五七）に象徴されるように、節度使や宦官そしてウイグル（回紇・回鶻）やチベット（吐蕃）といった人々の群像劇であった。そしてその劇は、群雄割拠する節度使の一人朱全忠（八五二～九一二）が唐王朝から禅譲を受けることで終幕し、場面は一層に陽の目を見ない五代十国時代へと転換していく。

さて唐王朝後半期初頭、世紀でいえば八世紀の三四半世紀以降から九世紀前半に、禅宗の群像劇の中で台頭してくるのが、馬祖道一（七〇九～七八八）を祖とする馬祖門派洪州宗である。後世の資料によると馬祖には弟子が「八十四人」[1]、「八十八人」[2]、「百三十九人」[3]あったとされており、多くの弟子を有して大門派を形成し、弟子たちは中国全土さらには新羅や日本にまで広がった。

禅宗史では八世紀前半以降、文学史でいう盛唐期（七一二～七六五）に北宗南宗論争があって、「初期禅」の北宗、荷沢宗（南宗）、牛頭宗、浄衆宗などの区分が出現する。そして安史の乱（七六三）後から会昌の廃仏（八四五）の

間に、北宗や牛頭宗などとともに馬祖門派洪州宗が南宗の総領として興隆していく。さらに会昌の廃仏後になると、この南宗を継いだ馬祖門派と石頭門派から「五家」が出現して、五代十国から宋代の禅へと繋がっていく。このように馬祖門派は南宗の正統継承者となり、現在まで「師資相承」している法脈であるが、本稿はその馬祖門派が南宗の中心門派となっていく形成段階を考察していくことにしたい。

馬祖門派の祖である馬祖は、その生涯を長江中流域で過ごした。彼は江西省の鄱陽湖に流入する長江支流の贛江や撫河を交通水路として、近在の山々で叢林を形成した一地方の指導者であって、全国的な知名度はなかった。先行研究によれば、その馬祖門派が大きな興隆を迎えるのは、貞元年間から元和年間（七八五～八二〇）とされ、弟子の広範囲に渡る活躍があったと指摘されている。[4] 馬祖の弟子の活躍は幾つかに系統分けできるが、石川力山は1、隠遁的山居修道型、2、積極的中央進出型、3、地方活動型の三つの類型に分け、第二類型の中央進出グループに鵝湖大義（七四六～八一八）、章敬懐暉（七五七～八一六）、興善惟寛（七五五～八一七）を配し、彼らが「六祖慧能―南岳懐譲―馬祖道一」という法脈の正統性を主張する運動を行って、

> 積極的に帝都長安に進出していった人々により、右に見てきた一連の運動が展開していったことを知ることができる。また馬祖は、揚子江以北の地へ伝道教化の足を進めたことは全く無かったが、これら帝都長安に進出し、入内説法し伝道した人々によって、馬祖の禅というものが天下によく知られるようになったことも確かである。

次の時代になると、百丈下や南泉下の人々が活躍し、南宗禅の本流を占めることになるが、馬祖示寂直後の教団は、これら第二の類型に属する人々の中央進出と馬祖顕彰の活動が、その中心をなしていたといえよう。[5]

馬祖が全国的に知られ、馬祖門派が南宗の正統と目されるようになったといい、馬祖門派の興隆には鵝湖大義、章敬

懐暉、興善惟寛の活躍があったと言及している。

先行研究では、鵝湖大義らの中央での活躍によって馬祖門派が認知されるようになった、という見解で一致している。すると次に以下の三つ問題が発生する。それは、

設問1　馬祖門派はなぜ中央・長安に進出できたのか。（主要因）

設問2　馬祖門派は中央に進出して、どのような活動をしたのか。（変化事象）

設問3　馬祖門派の言動は、どのような変化をもたらしたのか。（影響）

である。先行研究においては、設問1については明確な解答はないが[6]、設問2と3については、石川力山と楊曽文氏が、鵝湖大義らは馬祖門派の「六祖慧能―南岳懐譲―馬祖道一」の法系が南宗正統であることを顕彰し、その後、南宗内部で馬祖門派が最有力になっていくと解答している[7]。

本稿は、このような石川力山と楊曽文氏の成果に導かれつつ、問題として残された設問1を検討し、その上で設問2と3を再検証して、その歴史的意義を考察していくことを目的とするが、本稿では最初に中央に進出した鵝湖大義のみを取り上げることにする。それというのも鵝湖大義は最初に中央に進出し、馬祖門派が長安で認知され南宗禅の総領となっていくのに、重要な役割を果たしたと予測し、中央進出グループの中でもまず検討すべきであると考えたからだ。では以下、鵝湖大義について考察していこう。

二　鵝湖山での鵝湖大義と信州刺史劉太真

鵝湖大義は『景徳伝灯録』巻七の馬祖法嗣四十五人中に立伝されており[8]、また韋処厚（七七三～八二八）撰述の『興福寺内道場供奉大徳大義禅師碑銘』（以下『鵝湖碑銘』）がある[9]。このうち『伝灯録』は大半が問答なので、『鵝湖碑銘』

を中心にして鵝湖大義の生涯をたどろう。

『鵝湖碑銘』の構成は、はじめに当時の「禅宗の系譜と概況」が説明され、次に大義の行状、中央中原への進出、長安での入内と問答議論、江南での活動、没後と建塔、銘文という構成になっている。最初の「禅宗の系譜と概況」には、胡適の指摘で著名な「壇経改変」の文があり、これによって『鵝湖碑銘』は知られている。

では鵝湖大義の生涯を繙いていきたいが、『鵝湖碑銘』では鵝湖大義の行状が、時系列をバラバラにして記されているので、時間軸を直線に整えて論じていく。

鵝湖大義の生まれは、その没年が「元和十三年正月甲子、（中略）其の夜恬然として順化、報齢七十有三、僧臘五十有四なり（元和十三年正月甲子、（中略）其夜恬然順化、報齢七十有三、僧臘五十有四）」[10]と、元和一三年（八一八）正月に世寿七三で亡くなった、とあるところから計算して天宝五年（七四六）の生まれになる。そして、

大師、東海の徐氏、衢州須江の人なり。（中略）本郡の潛霊寺僧の恵績に依りて、二十にして具戒を受く。若しくは律、若しくは禅、通貫せざる無し。

大師東海徐氏、衢州須江人也。（中略）依本郡潛霊寺僧恵績、二十受具戒。若律若禅、無不通貫。[11]

東海徐氏で、衢州須江（浙江省衢州市）の出身とあり、永泰元年（七六五）に二〇歳で本郡潛霊寺の恵績について具足戒を受け、律と禅に通じた。続けて「後、道一を江西に謁し（後謁道一於江西）」[12]と、後に馬祖道一を江西で拝謁したとあるものの、これがいつなのかは明確でない。

受戒後、二〇代から三〇代にあたる大暦中（七六六～七七九）に、

大暦中、上饒郡の西百里の所に遊ぶ。山の名は鵝湖、三峰秀掲にして、霄を摩して江を蔭す、雞犬の四絶たり。錫を植え宴坐すること三日、猟者の弓矢を棄てて奔りて邑落に告ぐるもの有り。或いは苫蓋を披し、或いは岩石に窟して、未だ旬を逾えざるに来る者繈属たり。其の格物たるや此くの如し。

大暦中、遊上饒郡西百里所。山名鵝湖、三峰秀掲、摩霄蔭江、雞犬四絶。植錫宴坐三日、有猟者棄弓矢奔告邑落。或披苫蓋、或窟岩石、未逾旬而来者繈属。其格物也如此[13]。

上饒郡（江西省上饒市）の西百里の所にある鵝湖山に行き[14]、樹木の下や洞窟で頭陀禅行をしていると、それを見た猟師が麓の村に知らせ、十日（一旬）もせずに村落からの来訪者が数珠つなぎで集まった。以後、鵝湖大義は鵝湖山に住したようで、

貞元の初め、礼部侍郎の劉太真、出でて是の郡を典る。津を通し梁を修するに、水の為めに敗らるる。大師を以って衆しと為し、向伏して虔んで下山を請えば、不日にして成る。其れ物に応ずるや此くの如し。

貞元初、礼部侍郎劉太真出典是郡。通津修梁、為水所敗。以大師為衆、向伏虔請下山、成於不日、其応物也如此[15]。

貞元の初め（七八五～）に礼部侍郎の劉太真（七二五～七九二）が左遷されて、鵝湖山のある上饒郡・信州の刺史として赴任して、同地を流れる信江もしくは鉛山河の治水橋梁工事を行ったが、川の氾濫にあってうまくいかなかった。そこで地元民衆に信頼のあった鵝湖大義にお願いして、力を借りて治水工事を行ったところ、たちどころに工事が成功したという。

ここに登場する劉太真は、両唐書に列伝があり、[16] また裴度（七六五～八三九）による『劉府君神道碑銘』[17] がある。それらによると劉太真は、興元元年（七八四）に工部侍郎となり、翌年の貞元元年（七八五）に刑部侍郎となる。そして貞元三年（七八七）に礼部侍郎へと転じて知貢挙として科挙の省試・貢挙を管轄し、その時に「天下賓王の士の、実を尚び名に遠き者、竊かに相い賀す。公心を秉りて群議を排し、正道を履みて私門を杜ず（天下賓王之士、尚実遠名者竊相賀矣。秉公心而排群議、履正道而杜私門）」[18] と、多くの貴族や大臣の子弟を、専権で合格させ取り立てた。

だがこれが問題となり、貞元五年（七八九）に「遂に囂囂の口、是れ貝錦を成すに因り、出でて信州刺史と為る（遂因囂囂之口、成是貝錦、出為信州刺史）」[19] と、上饒郡・信州刺史に左遷される。そしてここで『鵝湖碑銘』にあるように治水事業を通じて鵝湖大義と親交を持った。

ただ劉太真は刺史に赴任してまもなく、「疾を移して郡を去り、貞元八年三月八日を以て、余幹県の旅館に於いて薨まかる（移疾去郡、以貞元八年三月八日、薨於余幹県之旅館）」[20] と、病気になり貞元八年（七九二）に余幹県（江西省上饒市余干県）の旅館で亡くなる。さらに息子諷も夭折して、劉太真の妻李氏と孫の祐だけになり没落した。もしかしたらこの時、鵝湖大義は劉太真没後の家族を保護していたのかもしれない。

劉太真没後、劉太真が礼部侍郎時代に合格させた「門生＝弟子」たちが恩義に報いる。没後一〇年の貞元一八年（八〇二）に、劉家の故郷丹陽の宣城郡溧水県（江蘇省常州市溧陽市）で本葬を行い、『劉府君神道碑銘』を立石し、その碑銘に門生たち「在朝廷者」七名、「在藩牧者」七名、「在幕府者」五名、「在畿者」三名が名を連ねた。[21] 彼ら門生たちはネットワーク（朋党）を形成していたのである。

このように鵝湖大義と劉太真との交流は、短い期間ではあったが、重要な意味があった。それは劉太真の門生ネットワークと繋がりが生じ、中央長安とのパイプを得たからである。また劉太真が「興元元従奉天定難功臣」であったことも重要である。興元元従奉天定難功臣とは、徳宗（在位七七九～八〇四）の下で昇進した家臣団をいうが、説明

を要しよう。

冒頭に論じたように、唐は安史の乱（七五五～七六三）以降、ウイグル（突厥）やチベット（吐蕃）の侵攻に悩まされ、その防衛のために節度使・藩鎮の勢力が増した。大暦一四年（七七九）に代宗が崩御し、徳宗が即位すると、徳宗は皇帝権力の強化を目指し、功徳使と宦官・禁軍の結びつきを断ち切ろうとして、功徳使を廃止し、寺観と僧尼についてはすべて祠部に属させた。[22]

だが建中二年（七八一）に河朔河南の藩鎮が反乱し、くわえてチベットが侵入する。さらに建中四年（七八三）に王武俊（七三五～八〇一）や朱滔（?～七七二）・朱泚（七四二～七八四）による「朱泚の乱」がおこり、長安は制圧され、徳宗は奉天府（陝西省咸陽市乾県。遼寧省瀋陽市の旧名奉天とは別）や興元府（陝西省漢中市）に逃亡して、仮首都を設置する羽目になる。興元元年（七八四）になって河中節度使李晟（七二七～七九三）の活躍により、やっと長安を奪還し、以前の状態に返った。これを「興元反正」という。

徳宗はこの朱泚の乱の時に、逃亡する徳宗に付き従った宦官や武人に対して「奉天定難功臣」や「元従奉天定難功臣」もしくは「興元元従奉天定難功臣」を賜い、[23]皇帝親衛隊である神策軍として配置した。貞元年間（七八五～八〇四）に入ると、これら興元元従奉天定難功臣が権力を掌握しはじめる。[24]

興元元従奉天定難功臣が唐王朝の権力を掌握していくとともに、興元元従奉天定難功臣は長安仏教の外護者となり、仏教勢力との共同体制を取るようになる。この点については岩崎日出男氏や中田美絵氏の研究があるので、[25]そちらを参照いただくとして、劉太真は興元元従奉天定難功臣であり、徳宗の下で昇進した徳宗に近しい人物で、これも鵝湖大義の中央進出に大きな影響があった。

三　鵝湖大義の中央進出と霍仙鳴

次に鵝湖大義の中央進出について見てみよう。まず『鵝湖碑銘』に中央進出がどのように描かれているかだが、『鵝湖碑銘』では最初に徳宗つまり「孝文皇帝」が、河朔河南の藩鎮の反乱や朱泚の乱といった「大難」を平定したとする。そして動乱平定後に宗教政策を変更して、「心を無為に斎しうす」と仏教などに帰依し、勅詔を出して「神策軍中尉」の官職を置いて禁軍を統治させ、さらに廃止していた「功徳使」を復活させて、「緇黄」つまり寺院道観・僧尼道士を管轄させていくことを述べるとともに、[26]鵝湖大義の上京と長安での運命的な出会いと入内を記録している。

心を洪州に契い、縁を上京に応しくす。孝文皇帝、既に大難を清め、心を無為に斎しうす。中尉を建てて以て武旅を総べ、功徳を名づけて以て緇黄を統ぶ。大師、之に来るの夕や、右神策護軍霍公、夢に見るなり。翌日、之を慈恩寺に訪ね、且つ寐と合す。遂に表聞して内道場供奉大徳と為す。

契心於洪州、応縁於上京。孝文皇帝、既清大難、斎心無為。建中尉以総武旅、名功徳以統緇黄。大師、来之夕也、右神策護軍霍公、見夢焉。翌日、訪之慈恩寺、且与寐合。遂表聞為内道場供奉大徳。[27]

つまり鵝湖大義は劉太真により中央進出の縁を得て上京する。そして長安に到着した日に、右神策護軍中尉の霍仙鳴（?～七九八）が、鵝湖大義の到着を霊夢によって知った。翌日、霍仙鳴が晋昌坊の慈恩寺を訪ねてみると、まさに鵝湖大義がいた。かくして霍仙鳴は徳宗に上表して、鵝湖大義を内道場供奉大徳とした。

このように鵝湖大義は、劉太真との縁によって上京し、長安では右神策護軍中尉の霍仙鳴の支援を受け、やがて入

内して内道場供奉大徳となった。ではここに登場する「右神策護軍中尉」の「霍仙鳴」とは何者なのか。

まず右神策護軍中尉とは、もともと西北辺境の防衛軍であった「神策軍」が、永泰元年（七六五）に皇帝を護衛する禁軍となり、それが徳宗の貞元二年（七八六）に左・右神策軍へと改編され大将軍二名が設置された。さらに貞元一二年（七九六）にその左・右神策軍を統帥する護軍中尉が設置されて、宦官が就いた官職である。[28]

霍仙鳴は両唐書に簡略だが竇文場と併記して立伝されており、[29]『旧唐書』によると「始め東宮に在りて徳宗に事う（始在東宮事徳宗）」と徳宗が皇太子（立皇嗣、七六四年）の時から使える宦官であった。やがて大暦一四年（七七九）に代宗が亡くなり、徳宗が皇帝に即位するが、建中四年（七八三）に朱泚の乱（涇師の乱）が起こった。

> 涇師の乱るるや、帝、禁軍を召して賊を禦（ふせ）がしめんとす。志貞、召集するも素より無く、是の時、並（まった）く至る者無し。唯だ文場と仙鳴のみ諸宦者及び親王を率い左右従い行く。
>
> 涇師之乱、帝召禁軍禦賊。志貞召集無素、是時並無至者。唯文場仙鳴率諸宦者及親王左右従行。[30]

徳宗は当時禁軍を統括していた白志貞（？～七八七）に、禁軍の出陣を命令した。しかし白志貞はそもそも徴兵をしておらず、軍隊も編成していなかったため、結局、竇文場と霍仙鳴だけが付き従って、徳宗は奉天に逃れた。その後、李晟などの活躍により、徳宗は長安に帰還することができた。

乱平定後つまり「興元反正」後については、『唐会要』巻七二に次のようにある。

> 興元克復し、晟、出でて風翔に鎮ず。始めて神策を分かって左右廂と為し、内官の竇文場と王希遷とをして、分かって両廂兵馬を知（つかさど）らしむ。

貞元二年九月二日、神策左右廂、宜しく改めて左右神策軍と為し、毎軍、大将軍二人を置く。興元克復、晟出鎮鳳翔。始分神策為左右廂、令内官竇文場・王希遷、分知両廂兵馬。
貞元二年九月二日、神策左右廂、宜改為左右神策軍、毎軍置大将軍二人。[31]

功労者であった武将の李晟を鳳翔・隴右節度使に任命し、宦官の竇文場と王希遷に神策軍を監視させている。これは『資治通鑑』巻二三二に、

上、長安に還り、頗る宿将が兵の多くの者を握るを忌み、稍稍に之を罷る。戊辰、文場を以って神策軍左廂兵馬使を監せしめ、王希遷をもって右廂兵馬使を監せしめ、始めて宦官をして分って禁旅を典らしむ。
上還長安、頗忌宿将握兵多者、稍稍罷之。戊辰、以文場監神策軍左廂兵馬使、王希遷監右廂兵馬使、始令宦官分典禁旅。[32]

というごとく、徳宗が武官の権力増大を削ぐために、李晟を神策軍から地方へ異動させ、側近の宦官に禁軍の監視役を担当させたものであった。さらに『旧唐書』の貞元一二年（七九六）六月の条に、

貞元十二年六月、特に護軍中尉両員、中護軍両員を立て、以って禁軍を帥（ひき）いせしむ。乃ち文場を以って左神策護軍中尉と為し、仙鳴をもって右神策護軍中尉と為し（後略）
貞元十二年六月、特立護軍中尉両員、中護軍両員、以帥禁軍。乃以文場為左神策護軍中尉、仙鳴為右神策護軍中尉（後略）[33]

神策軍を統帥するポストとして、護軍中尉二名と中護軍二名を立て、寶文場を左神策軍の護軍中尉に、霍仙鳴を右神策軍の護軍中尉に充てた。これによって寶文場と霍仙鳴の権勢は天下に振るったが、

時に寶と霍の権、天下に振い、藩鎮節将、多く禁軍より出で、台省清要、時に其の門より出づ。文場、驃騎大将軍を累加せらる。是の歳、仙鳴病し、帝、馬十匹を賜い、諸寺に於いて僧斎を為して以って福を祈らしむ。久しく病愈えず、十四年、倉卒にして卒す。上、左右の小使、正に将に食中に毒を加うべきを疑い、配流せし者、数十人なり。

時寶、霍之権、振於天下、藩鎮節将、多出禁軍、台省清要、時出其門。文場累加驃騎大将軍。是歳仙鳴病、帝賜馬十匹、令於諸寺為僧斎以祈福。久病不愈、十四年、倉卒而卒。上疑左右小使、正将食中加毒、配流者数十人。[34]

霍仙鳴は病になり、徳宗が馬十匹を下賜し、寺院で僧侶に斎会を出して寿福を祈祷したものの、貞元一四年（七九八）に急死してしまった。

このように霍仙鳴は、興元元年（七八四）以後、徳宗直属の宦官として重用され、貞元一二年（七九六）には、皇帝武力を統帥する双翼の右神策軍の護軍中尉に登りつめ、長安内に治外法権的特権を有した。そして同時期に「右街功徳使」となり宗教事業・文化政策も統括したようで[35]、『仏祖統紀』巻四一の貞元一二年の条に、

詔して罽賓三蔵般若等、長安崇福寺に於いて、烏荼進ずる所の華厳経を訳せしむ。円照・鑑虚・霊邃・澄觀、潤文証義す。帝親しく訳場に預かり、文に臨んで正を裁く。左右街功徳使の霍仙鳴と寶文場をして、専ら監護を領ぜしむ。

詔罽賓三蔵般若等、於長安崇福寺、訳烏荼所進華厳経。円照・鑑虚・霊邃・澄觀、潤文証義。帝親預訳場、臨文裁正。令左右街功徳使霍仙鳴・竇文場、専領監護。[36]

『華厳経』翻訳事業を、左右街功徳使の霍仙鳴と竇文場に監督させたとあり、実際『四十華厳』の後序には、

右神策軍護軍中尉・兼右街功徳使・元従興元元従・雲麾将軍・右監門衛大将軍・知内侍省事・上柱国・交城県開国男・食邑三百戸・臣霍仙鳴。[37]

霍仙鳴の官職として右神策軍護軍中尉とともに右街功徳使が記されており、さらに劉太真と同じく興元元従奉天定難功臣であったことも判明する。

以上のことから、鵝湖大義は貞元五年（七八九）に劉太真と知り合い、彼の二つのネットワーク、すなわち門生ネットワークと興元元従奉天定難功臣ネットワークにつながり、時期は不明だが上京した。そして長安では興元元従奉天定難功臣の霍仙鳴の庇護を受け、入内して内道場供奉大徳となった。さらに庇護者の霍仙鳴が貞元一二年（七九六）に右神策軍護軍中尉兼右街功徳使となると、『鵝湖碑銘』の碑題に「興福寺内道場供奉大徳」と「興福寺」が冠されているように、皇城西隣りにあった右街修徳坊の興福寺（もとの弘福寺）に留錫し、長安で活躍した。[38]

四　鵝湖大義の長安での活動

中央に進出した鵝湖大義の活動について、『鵝湖碑銘』には次のようにある。

順宗皇帝の儲闈に在りしに、安の余を問い、神を道域に棲ます。嘗て尸利禅師に問う、経に言わく、大地普し衆生、見性成仏と。（中略）後ち内の神龍寺に入る。法会群僧に湛然法師という者有り、登座して云く、仏道は遐険にして、刼を経ること無量なり。南鄙の人、後学を欺給す。（中略）後ち徳宗降誕の日、麟徳殿に於いて大いに論議を延ぶ（後略）。

順宗皇帝之在儲闈、問安之余、棲神道域。嘗問尸利禅師、経言大地普衆生見性成仏。（中略）後入内神龍寺。法会群僧有湛然法師者、登座云、仏道遐険、経刼無量。南鄙之人、欺給後学。（中略）後徳宗降誕日、於麟徳殿大延論議（後略）。[39]

順宗が皇太子でまだ東宮（儲闈）に居たときに、尸利禅師との問答にコメントして感心され、後に皇城の西内の神龍寺に入内した。そしてある法会で、湛然法師の話を聞いて反論した。さらに徳宗の祝聖（誕生日）に、麟徳殿で論議を行った。[40]

この文には二人の僧侶が登場している。最初の尸利禅師は、尸利（shicha、屍利、屠殺場）ではなく尸利（shiri＝Śrī）であって、『景徳伝灯録』巻一四、石頭法嗣二一人に「京兆尸利」として問答が著録されており、信州鵝湖大義の章にも問答が著録されているものの、[41]詳細は不明な人物である。そしてもう一人の湛然は、天台の荊渓湛然（七一一～七八二）に比定できるが、鵝湖大義が長安に進出した時期（貞元五年・七八九）には、湛然はすでに亡くなっている。つまりこの部分は史実性に疑義があり、『鵝湖碑銘』が制作された当時（元和一三年・八一八）の状況による脚色が含まれる。しかし鵝湖大義が貞元五年（七八九）以降、長安で皇帝権力に近い位置にあったことは判明する。

では他資料から鵝湖大義の長安での活動を検証してみると、順宗がまだ皇太子であった時に皇城で問答をし、後に西内の神龍寺に入ったというのは、『仏祖統紀』巻四一、徳宗の貞元一二年正月の条に、

十二年正月。皇太子に勅して内殿に於いて諸禅師を集め、伝法の旁正を詳定せしむ。
十二年正月。勅皇太子於内殿集諸禅師、詳定伝法旁正。[42]

貞元一二年（七九六）の正月、徳宗が皇太子の順宗に勅命して、内殿（内朝正殿か）に禅師を集めて、伝法相承の傍系正統問題を確定させたとあり。類似した内容が宗密（七八〇～八四一）の『裴休拾遺問』にもあって、

故に徳宗皇帝、貞元十二年、皇太子に勅して諸禅師を斉め禅門の宗旨を楷定せしめ、伝法者の傍正を捜求せしむ。遂に勅の下る有りて荷沢大師を立てて第七祖と為す。内の神龍寺に見に名記有り。又た七代祖師讃文を御製し、見に世に行わる。
故徳宗皇帝、貞元十二年、勅皇太子斉諸禅師楷定禅門宗旨、捜求伝法者傍正。遂有勅下立荷沢大師為第七祖。内神龍寺見有名記。又御製七代祖師讃文、見行於世。[43]

禅師を集めて御前で法論を行わせ、禅宗の門派を確定し、伝法相承の傍系正統を検査させたというところまでは同じで、その後に独自情報として、確定し検査させた結果、勅があって荷沢神会（六八四～七五八）を第七祖とし、そのことが西内の神龍寺の石碑か何かに銘刻され、また七代祖師の讃文を皇帝が作り、流通していると主張する。

この貞元一二年（七九六）に、勅があって「伝法の旁正」「禅門の宗旨」を議論し確定したというのは、そもそも湛然が『止観輔行伝弘決』で、

漢の明の夜夢みしより、陳朝に洎ぶまで、凡そ諸の著述の当代盛んに行わる者、目に溢れ、豫め禅門に厠じりて

衣鉢伝授する者、耳に盈つ。豈に止観の二字を聞かざる有らんや。

自漢明夜夢洎乎陳朝、凡諸著述当代盛行者溢目、豫厠禅門衣鉢伝授者盈耳。豈有不聞止観二字。[44]

進んで禅門で「衣鉢伝授」をする者を、盛んに聞いているといっているとおり、八世紀後半、禅宗で衣鉢伝授・伝法相承問題が喧しかったことがうかがわれる。そしてこれには神会が一代一人説と伝衣説とによって、自己の正統を排他的に主張したことが一つの契機としてあった。

ただ宗密の「荷沢大師を立てて第七祖と為す」という主張は、周辺資料を検討すると到底史実とはいえない。胡適や小川隆氏はこれを史実と見ているが、[45] 実際は宗密が自身の正統をいわんがための虚構である。

そもそも神会が最後に中央中原で知られたのは、慧堅（七一九～七九二）と李巨らによって、宝応二年（七六三）に神会の塔所である宝応寺が洛陽龍門に建立され、永泰元年（七六五）に塔銘が立石された時で、その後、中央での神会門派の活動は知られない。資料としては碑文に少し出るのと、『曹溪大師別伝』と『六祖壇経』と宗密が取り上げるだけで、忘却されていく。

八世紀後半成立の資料を見てみると、たとえば独孤及（七二五～七七七）撰の『舒州山谷寺覚寂塔隋故鏡智禅師碑銘』（以下『三祖碑銘』）には、「其の後、信公、教を以て宏忍に伝え、忍公、恵能・神秀に伝う。能公退いて曹溪に老い、其の嗣聞くる無し（其後信公以教伝宏忍、忍公伝恵能・神秀。能公退而老曹溪、其嗣無聞焉）」[46] と、伝法相承を述べるが慧能の嗣法者は聞いたことがないとある。禅宗の法系を記すことで著名な李華（七一七？～七七四？）の『故左溪大師碑』でも、「又た達摩五世して璨禅師に至り、璨又た能禅師に授く。今が南宗是なり（又達摩五世至璨禅師、璨又授能禅師。今南宗是也）」[47] と、南宗の存在は認めるものの、神会は忘却されている。つまり八世紀末期には神会を継承し顕彰してくれる門流は残っておらず、わざわざ神会を第七祖に推挙する理由がない。

貞元一二年（七九六）の皇太子臨席による宗論の目的は、史実関係が曖昧であった伝法相承を確定し、なおかつ皇帝という世俗最高権威が追認することにあった。そして当時、皇帝に近侍し中央で権勢を誇っていたのが霍仙鳴であり、彼が禅師として庇護していたのが鵝湖大義であるところからすれば、この宗論で「慧能―神会」に代わって、「六祖慧能―南岳懐譲―馬祖道一―鵝湖大義」の伝法相承が、南宗禅の正統であると表明されたのである。さらにいえばこの「伝法の旁正」「禅門の宗旨」の確定を受けて作られたのが『宝林伝』であろう。

貞元末年当時、鵝湖大義が皇帝に近かったというのは、先に引用した『鵝湖碑銘』の文で、鵝湖大義が徳宗の降誕日に、麟徳殿で論議を行ったというのにも表れており、これも『仏祖統紀』巻四一の憲宗の項に、

詔して鵝湖大義禅師を入らしめ麟徳殿に見え、諸法師と議論せしむ。

詔鵝湖大義禅師入見麟徳殿、与諸法師議論。[48]

皇帝が徳宗と憲宗とで異なるものの、鵝湖大義が皇帝の居城である東内大明宮の麟徳殿で、法師たちと議論をしたとあり、鵝湖大義は徳宗および順宗と近い関係にあった。

五　鵝湖大義の影響　―まとめにかえて―

最後に、貞元五年（七八九）以降の鵝湖大義の長安での活動が、どのような影響を与えたかを見てみよう。八世紀の第四四半世紀から九世紀の第一四半世紀にかけては、『重建禅門第一祖菩提達摩大師碑』、『三祖碑銘』、『贈諡大鑑禅師碑』などが林立し、南宗の六代祖師が顕彰されていくのが特徴である。これらの資料のうち『重建禅門第一祖菩

提達摩大師碑』の「陰文」では、

菩提達摩、西域より中国に至り、禅宗第一祖と為る。内に心印を伝えて以って宗と為し、謂えらく意は文字の外に出ず。外に袈裟を伝えて以って信と為し、信もて師資を表す。其の袈裟、可大師に授け。可、粲に授け、粲、信に授け、信、忍に授け、忍、能に授く。（中略）祖師知んぬ、当来の学徒、必ず意を注いで謂えり、法、衣上に在りと。知らず法、本と無為にして、之を得たれば永く三界を超ゆるを。斯の玄旨を了らば、是れ真宗に達せり。所以に誡めて衣を伝うるを絶つ。学人の意を得たる者をして、広通流布せしめば、化、無窮に及び、溺俗を沉沙に拯い、迷途を苦海に擢くものなればなり。曹溪能の弟子は南岳恵譲、譲の弟子は龔公山洪州道一、洪州の弟子は信州鵝湖山大義なり。大義、貞元中、内道場供奉大徳たり。

菩提達摩自西域至中国、為禅宗第一祖。内伝心印以為宗、謂意出文字外。外伝袈裟以為信、信表師資。其袈裟授可大師。可授粲、粲授信、信授忍、忍授能。（中略）祖師知、当来学徒、必注意謂法在衣上。不知法本無為、得之者永超三界。了斯玄旨、是達真宗。所以誡絶伝衣。令学人得意者、広通流布、化及無窮、拯溺俗於沉沙、擢迷途於苦海者矣。曹溪能弟子南岳恵譲、譲弟子龔公山洪州道一、洪州弟子信州鵝湖山大義。大義貞元中内道場供奉大徳。[49]

達磨から慧能への伝衣と伝法相承を述べ、慧能の時に、仏法が衣上にあるかのような間違いが起こったので伝衣を断絶したといい、以後、仏意を得て心印し相承した慧能の法脈として、「南岳慧譲―馬祖道一―鵝湖大義」の伝法相承を述べて、南宗正統を主張している。

このように鵝湖大義の活動によって、馬祖門派が南宗禅の正統と目されるようになる。ただ兄弟弟子である興善惟

寛の『西京興善寺伝法堂碑銘』や章敬懐暉の『唐故章敬寺百巌大師碑銘』、さらには宗密の著書には鵝湖大義は登場しない。これは鵝湖大義が徳宗と順宗に近かったことが理由だ。『鵝湖碑銘』には、

永貞の初め、順宗康らかならず、大師遂に本郡に帰る。（中略）故に郡守の藩岳、請益せざる無く、以て政術に有助するを為す。元和十三年正月甲子（中略）報齢七十有三、僧臘五十有四なり。門弟子無数にして、或いは名山百郡を巡る。今、左右に親侍する者は則ち広済、翛然、献中、普修、霊訾、宏昭なり。

永貞初、順宗不康、大師遂帰本郡。（中略）故郡守藩岳、無不請益、以為有助政術。元和十三年正月甲子（中略）報齢七十有三、僧臘五十有四。門弟子無数、或巡名山百郡。今親侍左右者則広済、翛然、献中、普修、霊訾、宏昭。[50]

永貞の初め（八〇五）に順宗が健康を害すと、鵝湖大義は本郡に帰ったとあり、これは順宗代の「二王八司馬」の改革派による「永貞の革新」が七ヶ月で頓挫し、柳宗元や劉禹錫などが左遷されたのに合わせて、順宗に組みした鵝湖大義も中央から去ったことを意味している。

永貞の革新がついえて「内禅」がなされて以後、元和年間（八〇六～八二〇）には守旧派が力を持った。それゆえ、元和年間に作られた興善惟寛などの碑銘、さらにはそれ以後の宗密の著書の中では、順宗と結びついた鵝湖大義は意図的に無視され、以後、傍流へと甘んじた。[51] しかし鵝湖大義によって、馬祖門派が南宗禅の正統と意識されるようになり、さらには現在の祖統説が完成したといえる。いわば祖師禅の時代を切り開いたのが鵝湖大義なのであった。

今回の鵝湖大義の研究から発生する課題は、鵝湖大義と荷沢宗と彼以外の馬祖門派の関係、馬祖門派と『曹溪大師別伝』と『六祖壇経』の関連、『宝林伝』の内容と歴史的位置づけ、鵝湖大義の思想と馬祖禅の同異などが課題とし

て挙げられる。これらについては、柳田聖山、石川力山、石井修道氏、鈴木哲雄氏、賈普華氏などが論じている。[52] それらを指針にしつつ、慧能門派の南宗禅から馬祖門派の南宗禅へという変遷を解明していくことが、新しい唐代禅宗史・禅思想を切り開く一布石となると提言しておく。

注

（1）『圜悟語録』巻六「馬大師出八十四人善知識」大正蔵四七、七四二頁上。『洪州百丈山大智禅師語録』「潙山云、馬祖出八十四人善知識」新文豊版卍続蔵一一九、八一八頁下など。

（2）『祖堂集』巻一四、馬祖伝「大師下親承弟子八十八人」、及び同巻一六、黄檗伝。

（3）『景徳伝灯録』巻六、馬祖章「師入室弟子一百三十九人」大正蔵五一、二四六頁中。

（4）楊曾文『唐五代禅宗史』中国社会科学出版社、一九九九年、三二二頁。杜継文・魏道儒『新版中国禅宗史』江蘇人民出版社、二〇〇八年、二四七頁、二五五頁。

（5）石川力山「馬祖教団の展開とその支持者達」『駒澤大学仏教学部論集』二、一九七一年、一六六～一六七頁。このほか鵝湖大義らの中央進出については、柳田聖山『初期禅宗史書の研究』法蔵館、一九六七年、三六〇～三六一頁。楊曾文『唐五代禅宗史』中国社会科学出版社、一九九九年、三三七頁。杜継文・魏道儒『新版中国禅宗史』江蘇人民出版社、二〇〇八年、二五一頁などに言及されている。

（6）馬祖や西堂智蔵（七三五～八一四）など江西で活動した馬祖門派が、裴諝、路嗣恭（七一一～七八一）、李兼などの江西の官僚たちと関係することで発展したことについては、以下に論及がある。楊曾文「唐代禅宗史上幾個問題的考証」『国学研究』六、一九九九年、四八〇～四八四頁。杜継文・魏道儒『新版中国禅宗史』江蘇人民出版社、二〇〇八年、二五一頁。

（7）石川力山「馬祖教団の展開とその支持者達」前掲、一六六頁。楊曾文『唐五代禅宗史』前掲、三三八頁、三四七頁。

（8）『景徳伝灯録』巻七、信州鵝湖大義章、大正蔵五一、二五三頁上。『仏祖歴代通載』巻一五にも同文が収録されている。大正蔵四九、六一四頁上～中。

(9) 韋処厚撰『興福寺内道場供奉大徳大義禅師碑銘』『全唐文』巻七一五。

(10) 『鵝湖碑銘』『全唐文』巻七一五。『景徳伝灯録』では「師於元和十三年正月七日帰寂、寿七十四」と、七四歳になっている。大正蔵五一、二五三頁上。

(11) 『鵝湖碑銘』『全唐文』巻七一五。

(12) 『鵝湖碑銘』『全唐文』巻七一五。

(13) 『鵝湖碑銘』『全唐文』巻七一五。「雞犬四絶」は意味未詳だが、鶏と犬は『淮南子』の淮南王劉安（前一七九～前一二二）が仙人になったときに、鶏と犬がともに昇天したという「一人得道、鶏犬昇天」の故事や、許真君（二三九～三七四）の「一人飛昇、仙及鶏犬」の故事があることから、「天仙界のような清絶地」の意味にとった。もしくは鶏や犬は人家に属する家畜であるので、「四方に民家生活感が無い幽絶地」という意味か。「繈属」はお金を紐に通してまとめた銭差しで、意味は「数珠つなぎ」と同じだろう。

(14) 鵝湖山は江西省上饒市鉛山県に存し、南宋時代に朱子と陸象山らが会談した「鵝湖の会」で著名である。

(15) 『鵝湖碑銘』『全唐文』巻七一五。

(16) 『旧唐書』巻一三七、列伝八七、劉太真伝。『新唐書』巻二〇三、列伝一二八、劉太真伝。

(17) 裴度撰『劉府君神道碑銘』『全唐文』巻五三八。

(18) 『劉府君神道碑銘』『全唐文』巻五三八。『旧唐書』巻一三七、列伝八七、劉太真伝には「及転礼部侍郎、掌貢挙、宰執姻族、方鎮子弟、先収擢之」とあり、『新唐書』巻二〇三、列伝一二八、劉太真伝には「遷礼部、掌貢士、多取大臣貴近子弟、坐貶信州刺史」とある。

(19) 『劉府君神道碑銘』『全唐文』巻五三八。

(20) 『劉府君神道碑銘』『全唐文』巻五三八。

(21) 『劉府君神道碑銘』『全唐文』巻五三八。

(22) 『続開元釈教録』巻中、大正蔵五五、七六一下～七六三頁上。

(23) 黄楼「唐徳宗〝奉天定難功臣〟、〝元従奉天定難功臣〟雑考」『魏晋南北朝隋唐史資料』二四、二〇〇八年。黄楼氏によると「功臣」の呼称に区分があるとされるが、本稿では以下一括して「興元元従奉天定難功臣」と呼ぶ。

(24) 塚本善隆「唐中期以来の長安の功徳使」京都『東方学報』四、一九三三年（再録『塚本善隆著作集』第三巻、大東出版社、一九七五年）。

(25) 岩崎日出男「般若三蔵の在唐初期における活動の実際について」『高野山大学密教文化研究所紀要』

一五、二〇〇二年。同「法門寺の埋納物に記された僧の出自とその経歴について」『高野山大学密教文化研究所紀要』一六、二〇〇三年。中田美絵「唐代徳宗期『四十華厳』翻訳にみる中国仏教の転換」『仏教史学研究』五三巻一号、二〇一〇年。同「八世紀後半における中央ユーラシアの動向と長安仏教界」『関西大学東西学術研究所紀要』四四、二〇一一年。

(26) 『宋高僧伝』巻一六、道澄伝には「貞元二年二月八日、帝於寺受菩薩戒」と、徳宗が菩薩戒を受けて、仏法天子（転輪聖王）となったことを記す。大正蔵五〇、八〇六頁中。

(27) 『鵝湖碑銘』『全唐文』巻七一五。

(28) 神策軍については、小畑龍雄「神策軍の成立」『東洋史研究』一八巻二号、一九五九年。何永成『唐代神策軍研究』台湾商務印書館、一九九〇年。李宇一「中唐期における左・右神策軍に関する一考察」『関西大学東西学術研究所紀要』五一、二〇一八年、を参照。

(29) 『旧唐書』巻一八四、列伝一三四、宦官、竇文場・霍仙鳴伝。『新唐書』巻二〇七、列伝一三二、宦者伝上、竇文場・霍仙鳴伝。

(30) 『旧唐書』巻一八四、列伝一三四、宦官、竇文場・霍仙鳴伝。

(31) 『唐会要』巻七二、京城諸軍・府兵・軍雑録・馬・諸監馬印・諸蕃馬印。

(32) 『資治通鑑』巻二三一、興元元年八月癸卯の条。また同条には「李晟（中略）癸卯、以晟兼鳳翔・隴右節度等使及四鎮・北庭・涇原行営副元帥、進爵西平王（後略）」とある。

(33) 『旧唐書』巻一八四、列伝一三四、宦官、竇文場・霍仙鳴伝。

(34) 『旧唐書』巻一八四、列伝一三四、宦官、竇文場・霍仙鳴伝。

(35) 功徳使については、塚本善隆「唐中期以来の長安の功徳使」前掲。室永芳三「唐長安の左右街功徳使と左右街功徳巡院」『長崎大学教育学部社会科学論叢』三〇、一九八一年。盧在性「唐徳宗と功徳使」『東方宗教』七九、一九九二年、を参照。右街功徳使の霍仙鳴の前任は、王希遷であったようで、『大唐貞元続開元釈教録』巻中の貞元五年七月一日の条に「右街功徳使王希遷」とある。『大唐貞元続開元釈教録』巻中、貞元五年七月一日の条、大正蔵五五、七六二頁下。

(36) 『仏祖統紀』巻四一、貞元一二年の条、大正蔵四九、三八〇頁上。

(37)『四十華厳』後序、大正蔵一〇、八四九頁上。

(38)『長安志』巻一〇、唐京城四、修徳坊に「右神策軍営」とあり、『唐両京城坊考』巻四、西京、長安県所領朱雀門街西第三街に「修徳坊、右神策軍営」とあって、設置年代は不詳ながら、右神策軍営が修徳坊に置かれており、右神策軍護軍中尉兼右街功徳使となった霍仙鳴の庇護で、鵝湖大義が修徳坊にある興福寺に入れたと推定した。

(39)『鵝湖碑銘』『全唐文』巻七一五。

(40)神龍寺は、従来、場所が明確でなかったが、長安の皇城の西内にある神龍殿に付属する皇族の私寺である。まず神龍殿は『長安志』巻六に「左有神龍門。内曰神龍殿」とあり、また『唐両京城坊考』巻一に「甘露之左曰神龍殿」とある。そして神龍寺は、創建時期は不明ではあるが、柳宗元（七七三～八一九）の「為王京兆賀嘉蓮表」に「出西内神龍寺前水渠内合歓蓮花図一軸示百寮者」、権徳輿（七五九～八一八）の「中書門下賀神龍寺渠中瑞蓮表」に「示臣等神龍寺殿前渠中瑞蓮図、其花一茎両房者」とあるように、柳宗元が長安に居た徳宗順宗の時代に、西内に神龍寺があったことが判明する。そして『旧唐書』巻一八上、武宗紀の会昌三年に「六月、西内神龍寺災」とあるように、会昌三年（八四三）に火災にあった。『長安志』巻六、宮室四、唐上、西内。『唐両京城坊考』巻一、西京、宮城。権徳輿「中書門下賀神龍寺渠中瑞蓮表」『全唐文』巻四八四。柳宗元「為王京兆賀嘉蓮表」『全唐文』巻五七〇。『旧唐書』巻一八上、武宗紀、会昌三年六月。

(41)『景徳伝灯録』巻一四、京兆尸利章、大正蔵五一、三一〇頁中。同巻、信州鵝湖大義章、大正蔵五一、二五三頁上。

(42)『仏祖統紀』巻四一、徳宗、貞元一二年正月の条、大正蔵四九、三八〇頁上。

(43)『裴休拾遺問』、新文豊版卍続蔵一一〇、八六七頁下。

(44)『止観輔行伝弘決』、大正蔵四六、一四二頁中。『止観輔行伝弘決』は永泰元年（七六五）に現行本が完成している。

(45)胡適『神会和尚遺集』上海亜東図書館、一九三〇年。小川隆『神会　敦煌文献と初期の禅宗史』唐代の禅僧2、臨川書店、二〇〇七年、二二～二三頁。

(46)独孤及撰『舒州山谷寺覚寂塔隋故鏡智禅師碑銘』『全唐文』巻三九〇。

(47)李華撰『故左溪大師碑』『全唐文』巻三二〇および『唐文粋』巻六一および『文苑英華』巻

八六一。

(48)『仏祖統紀』巻四一、憲宗の項、大正蔵四九、三八〇頁下。

(49)『重建禅門第一祖菩提達摩大師碑陰文』の立石は、文中に「至我唐元和閹茂之歳」とあり、閹茂は戊年であり、元和年間の戊は元年（八〇六）か一三年（八一八）になる。元和元年（八〇六）だと、鵝湖大義が中央を追われたのを受けて顕彰のためであり、元和一三年（八一八）だと、鵝湖大義が亡くなったのに合わせて立石されたのだろう。『重建禅門第一祖菩提達摩大師碑陰文』『全唐文』巻九九八。沖本克己「達摩碑文およびその関連資料について」『沖本克己仏教学論集』巻三、山喜房仏書林、二〇一六年を参照。

(50)『鵝湖碑銘』に出る弟子のうち、広済は興元元従奉天定難功臣が推進した『四十華厳』翻訳の訳語として洛京天宮寺から列座している。さらに密教などにも精通していたようで、のちに「崇福寺翻経五部持念・翰林待詔・検校鴻臚少卿・賜紫」となり、法門寺の仏舎利奉迎にも携わっている。『四十華厳』巻四〇、大正蔵一〇、八四八頁下。翛然は、日本天台宗の祖最澄（七六七～八二二）が貞元二〇年（八〇二）に入唐した際に、天台山禅林寺（浙江省台州市天台県）で禅を教えた人物である。つまり大義の弟子は中原から江南まで、幅広く分布して、禅に限らない仏教的広がりをもっていた。従来、翛然については、『伝灯録』巻六に馬祖の弟子として「王姥山翛然」とあることから、馬祖の弟子とされていた。しかし大義碑銘にあるように翛然は馬祖の孫弟子である。禅宗と密教が結びつくのは北宗に見られるように中原であり、翛然の兄弟弟子である広済が、密教に関係しているところからしても、そうであろう。「王姥山」は現在の天姥山（浙江省紹興市新昌県）であり、天台山（浙江省台州市天台県）の西北に位置する。

(51)興善惟寛と章敬懐暉が要請して元和一〇年（八一五）に成立する南岳懐譲の碑銘『衡州般若寺観音大師碑銘』には、鵝湖大義は出てこない。権徳輿（七五九～八一八）が撰した『唐故洪州開元寺石門道一禅師塔銘并序』にも鵝湖大義は出てこないが、これは権徳輿が章敬懐暉の『唐故章敬寺百厳大師碑銘』を撰しているように、馬祖塔銘が章敬懐暉門派によって依頼されたためであろう。『衡州般若寺観音大師碑銘』『唐文粋』巻六二、『全唐文』巻六一九。権徳輿撰『唐故洪州開元寺石門道一禅師塔銘并序』『全唐文』巻

五〇一。順宗時代の禅に関しては、金井徳幸「唐代順宗朝と南宗禅―劉禹錫の周辺」『社会文化史学』六、一九七〇年がある。

(52) 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』法蔵館、一九六七年、第五章『宝林伝』の成立と祖師禅の完成。石川力山「馬祖禅形成の一側面」『宗学研究』巻一三、一九七一年。石川力山「馬祖教団の展開とその支持者達」前掲。石川力山「馬祖像の変遷過程」『印仏研』二〇巻二号、一九七二年。石川力山「百丈教団と潙山教団」『印仏研』四一巻一号、一九九二年。鈴木哲雄「潙山語録成立の背景とその性格」『印仏研』二〇巻二号、一九七二年。鈴木哲雄「江西における馬祖とその門下―年次考―」『印仏研』二八巻一号、一九七九年。西口芳男「馬祖の伝記」『禅学研究』巻六三、一九八四年。賈普華『古典禅研究―中唐至五代禅宗発展新探（修訂文）』上海人民出版社、二〇一三年。賈普華著、斎藤智寛監訳、村田みお訳『古典禅研究―中唐より五代に至る禅宗の発展についての新研究』汲古書院、二〇一七年。石井修道「袁州楊岐山をめぐる南宗禅の動向」『印仏研』三八巻二号、一九九〇年。同「百丈教団と潙山教団」『印仏研』四一巻一号、一九九二年。